日向の匂い

札幌市医師会
竹田眼科
竹田（たけだ）　眞（まこと）

もう何十年前のことだろう。ちいさな男の子が思う存分夏の日差しの中を走り回って、日陰に涼んでいた私の膝にちょこんと座って一休み。その子の頭から「日向の匂い」がした。むっとむせ返るような、エネルギーに満ちあふれた、それでいて爽やかで一寸香ばしい若々しい匂いである。若気の至りで喫煙習慣を30年弱続け、飲酒習慣もそれに追い打ちをかけて、いつしか私の嗅覚はほとんどゼロになってしまった。草いきれも、甘い砂糖の香りも石炭酸の臭いをまとった母の匂いも全く感じなくなってから久しい。ただ口に含んで鼻に抜けさせた赤ワインの香だけは馥郁と感じるのは不思議である。そんな私にも可愛い男の孫がまた授かり、部屋中を走りまわって、私の膝の上で一休みした。その時突然私の脳裏にあの香ばしい「日向の匂い」が古い記憶と共に蘇った。そう、自分にも嗅覚が有ったことがあるのだ！

老子は、〔見れども見えないものを「夷」、聞けども聞こえないものを「希」、触ろうとしても触れないものを「微」という。我々が追い求めている「道」とは、そのような存在なのである〕と言っている。傘寿を目前にして、私の五感はどれもこれも劣化が激しく、まるで妄想の世界に住んでいるようである。感覚器が衰えると、感性も鈍くなる。感性が鈍くなると妄想もビビッドではなくなると思うのだが、妄想だけはかえって強くなるようだ。こんな私はきっと「道」を極めるのに一番適していると思い、日々を暮らしている。きっと死ぬ前に悟りが開けるだろう。そして自己満足的達成感の中に安らかに「死」を迎えることが「夢」である。

まだ40代の頃、患者さんに内科医師の奥様がいた。訴えが定まらず、重大な眼疾も見つからないタイプの人であった。時々ご主人も一緒に来られて話を聞いてくれる。或る時その先生がぽつりと話された。「先生（私）を見ていると若い頃を思い出します。今は年を取って新しい知識は頭に入らず、患者さんも減って、古い医療を細々と続けているだけです。でも時に私でなければ治せない患者さんが来ます。そんな時は私もお役に立ってると実感できます。今はそれが生きがいです」その時はなるほどそうなのか、と思った。

ふと現実に戻ると目の前に患者さんがいる。さてこの人の今日の訴えは何だろう？　その根本には何が潜んでいるのだろう？　私はこの患者さんの役に立てるだろうか？　私より他の誰かに診療を依頼した方が良かろうか？」、「一体診断は何だろう、適切な治療法は有るだろうか？」、「現代医学的には原因不明だが、漢方的に打つ手は有るか？」、「それよりなにより、私は現代医学的な知識を十分持っているか？」、「保険医として真っ当にやっているのか？」、考え始めると心は千々に乱れる。引き際は誰かが決めてくれるだろう、と他力本願の日々である。「もうそろそろ潮時ですよ」と言われるまで、「先生長生きしてくださいよ」、「先生だけが頼りです」などという言葉に甘えて、死ぬまでこの幸せが続いてくれたら、そしてそのことが誰の迷惑にもならなければ、こんな嬉しいことはない。

北海道医報「会員のひろば」投稿募集

◇情報広報部◇

北海道医報では、「会員のひろば」への投稿を募集しています。記事の内容は自由です。医療情勢、診療で日頃から感じること、趣味・紀行、エッセイ、自己紹介等でも可です。

1．記 事 制 限：1記事あたり1ページ以内。
2．文　字　数：600～1,000字（1段分）または1,600～2,000字程度（2段1ページ分）
　　※いずれも写真・図含まず。
3．掲　　載：掲載可否および掲載号は広報委員会にて決定します。
4．原稿送付先：ihou@m.doui.jp
5．問い合わせ先：011-231-7661（情報広報部）